第３章　実地調査「障がいのある人の自然体験に係る学習機会の充実に向けた実地調査」

１　調査の概要

２　調査の方法

３　調査の内容

４　調査の結果

５　考察（成果と課題）

第３章　実地調査「障がいのある人の自然体験に係る学習機会の充実に向けた実地調査」

１　調査の概要

（１）目的

障がいの有無にかかわらず全ての人が体験できる「自然体験や地域散策を通じて学ぶツアー」の実践に向けた調査を通じて、今後の障がいのある方を対象としたツアープログラムの実施に向けた実証研究を行う。

（２）調査方法等の概要

「インクルーシブツアーIn ほっかいどう」

・障がいのある方も「自然体験や散策」などを通じた学びを体験できるような「体験ツアープログラム」の開発を目指し、実地調査を行う。
・社会教育施設や景勝地、北海道遺産等の「学び」につながるスポットを対象とする。
・新型コロナウイルス感染症対策として、調査員が現地調査記録動画を撮影し、調査研究協力員（障がい当事者）に視聴してもらう。
・記録にあたっては、障がい当事者の視点（バリアフリーの状況、車椅子使用時の状況）を意識した撮影等を行う。
・調査終了後、動画を「調査研究協力員（障がい当事者)」に視聴を依頼し、ヒアリングを行う。
・ヒアリング終了後、調査報告書としてまとめる。

２　調査の方法

（１）日程

ア　実地調査
　令和３年（2021 年）10 月 22 日（金）～23 日（土）

イ　ヒアリング調査
　令和４年（2022 年）１月 19 日（水）帯広市（オンライン）
　令和４年（2022 年）２月 16 日（水）札幌市

（２）場所

ア　実地調査：北海道十勝地方
　・スノーピーク十勝ポロシリキャンプフィールド（帯広市拓成町）
　・帯広競馬場（とかちむら・馬の資料館）（帯広市）
　・足寄町動物化石博物館（足寄町）
　・然別湖ネイチャーセンター（鹿追町）

イ　ヒアリング調査
　・帯広市（オンライン）
　・札幌市（北海道庁別館）

（３）調査員（研究員）

ア　実地調査

北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課職員３名

北海道立生涯学習推進センター職員１名

イ　ヒアリング調査

北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課職員１名

北海道立生涯学習推進センター職員２名

３　調査の内容

（１）実地調査

①スノーピーク十勝ポロシリキャンプフィールド（帯広市拓成町）の視察及び動画撮影

②帯広競馬場（とかちむら・馬の資料館）（帯広市）の視察及び動画撮影

③足寄動物化石博物館（足寄町）の視察及び動画撮影

④然別湖ネイチャーセンター（鹿追町）の視察及び動画撮影

（２）ヒアリング調査

①調査対象者（調査研究協力員）

・28 歳男性（帯広市在住）：肢体不自由者（右上肢）

・44 歳女性（札幌市在住）：肢体不自由者（下肢、電動車いす使用）

②調査内容

実地調査で撮影した動画を視聴し、ヒアリングを実施

質問項目

・どのようなライフスタイルを送っているか、対象者自身の生活実態を理解する質問

・対象者が求める自然体験活動や体験ツアーの価値

・普段利用している社会教育施設やこれまで訪問した景勝地、北海道遺産等のスポット

・これまで利用した施設等について、障がい当事者として困ったことやこうしてほしいという要望

・普段実施している又はこれまで実施した体験活動の種類、内容、その理由

・障がい当事者の視点から視聴した動画の内容についての感想及び課題点

例）施設のバリアフリー、スタッフの対応等

ア 自然体験活動施設（スノーピーク十勝ポロシリキャンプフィールド）

イ 北海道遺産関連施設（帯広競馬場）

ウ 社会教育施設（足寄町動物化石博物館）

エ 自然体験学習提供施設（然別湖ネイチャーセンター）

・コロナ禍において自然体験活動等を実施する際に必要とする合理的配慮

４　調査の結果

（１）障がい当事者に関する基本情報

項　目	調査対象者Ａ	調査対象者Ｂ
①障がい種別	身体障がい （肢体不自由：車椅子不要）	身体障がい （肢体不自由：車椅子必要）
②性別・年齢	男性・28 歳	女性・44 歳
③職種	事務職	事務職
④居住地域	帯広市	札幌市
⑤障がいに診断された時期	就学前（生まれつき）	就学前（生まれつき）
⑥特別支援学校通学経験	有り（高等養護学校通学）	無し（普通学校通学）
⑦求める自然体験活動や体験ツアーの価値	北海道の豊かな自然環境を生かしたアウトドア	北海道の豊かな自然環境を生かした各種体験活動
⑧普段利用している社会教育施設やこれまで訪問した景勝地、北海道遺産等のスポット	・高校の宿泊研修で青少年体験活動支援施設を利用 ・博物館見学 ・ドライブ（景勝地見学）	・中学や高校の宿泊研修で青少年体験活動支援施設を利用 ・美術館見学 ・景勝地見学
⑨これまで利用した施設等について、障がい当事者として困ったことやこうしてほしいこと	・障がい者同士で利用した場合はそれほど困ることはないが、人的なサポートがあるとよい	・トイレやお風呂、バリアフリー等の環境整備（特に、電動車椅子の場合、地面がフラットであることが必要）
⑩普段実施している体験活動の種類、内容	・水泳や卓球等のスポーツ	・病院のリハビリなど体を動かす程度
⑪その他	・高等養護学校で様々な障がい者と接してきた	・自然散策はしない。虫が嫌い

（２）障がい当事者の視点から視聴した動画の内容についての感想及び課題点

①自然体験活動施設（スノーピーク十勝ポロシリキャンプフィールド）

https://sbs.snowpeak.co.jp/tokachiporoshiri/

・砂利や芝生など道路が舗装されていない場所は、電動車椅子を使用している人にとって走行が困難。全部の道を舗装する必要はないが、車椅子用の動線が必要。

・段差が障へきになるかは、車椅子を使用している人の中でも個人差がある。電動車椅子を使用している人には、フラットな方がよい。

・キャンプ場の住箱（宿泊施設）へ入る際、階段しかないのは車椅子を使用している人にとって移動が困難なため、スロープが必要。

・住箱とテントのどちらを利用するかは、障がいの有無にかかわらず好みがあると思う。また、障がい種によっても利用のしやすさが異なるので、利用者が選択できるようにするとよい。

・車椅子から降りられる人はテントを利用できると思う。

・テントの設営などキャンプをする際に、障がいの有無にかかわらず、道具を使い慣れていない人をサポートする専門スタッフがいるとよい。

・車椅子を使用している人でも利用できる多目的トイレが設置されていることはよい。

スノーピーク十勝ポロシリキャンプフィールド

芝生のキャンプサイト

トレーラーで可動できる住箱

ディスティネーション十勝の施設内

②北海道遺産関連施設（帯広競馬場・とかちむら・馬の資料館）https://www.tokachi-mura.com

・馬の資料館は１階と２階に展示室があるが、２階へ上がるためのエレベーターがないのは、車椅子を使用している人にとって自力で移動するのは困難。

・同じ複合施設「とかちむら」内にある他の施設で食事をしたほか、ばんえい競馬場へ行ったことがある。施設内には多目的トイレもあり、車椅子を使用している人でも見学できる場所があるのはよい。

「とかちむら」にある馬の資料館

階段で移動する１Ｆと２Ｆの展示室

北海道遺産のばんえい競馬を見学できる競馬場

座って見学できる席

③社会教育施設（足寄動物化石博物館）https://www.museum.ashoro.hokkaido.jp

・バリアフリーに対応した施設なので、安心して見学が可能。
・展示内容は、車椅子を使用している人でも鑑賞はできるが、解説の文字については、もう少し大きい方が読みやすい。
・展示の高さについて、車椅子を使用している人や小さな子供の目線に合わせてもう少し低くした方がよい。
・ミニ発掘、レプリカづくり、古生物模型づくりなど、どの体験メニューも座って活動できるので安心。

足寄動物化石博物館

スロープになっている入口

恐竜に関する展示

車椅子の視点から見た展示

④自然体験学習提供施設（然別湖ネイチャーセンター）https://www.nature-center.jp

・屋外にスロープを設置してあるが、舗装されていないため、電動車椅子を使用している人にとっては走行が困難。スロープの横に転落防止のためのガードも必要。
・屋外にある足湯について、肢体不自由者にとって靴やソックスを脱いだり履いたり、濡れた足を拭いたりするのが困難。
・美しい大自然と触れ合うことができるフィールドにおいて、様々な自然体験活動ができ、アウトドアガイドのスタッフ体制が充実しているのはよいが、障がいの有無にかかわらず体験活動できるプログラムを提供しているのか情報がほしい。

然別湖

屋外にある足湯

舗装されていないスロープ

ドローンを使って撮影した然別湖

⑤その他

・自然体験活動は屋外で活動することが多いと思うが、屋外を車椅子で移動する際に、天気によって左右される。降雨など天気が悪いと道路のコンディションが悪くなる上、傘など手に持つものも必要になるので、屋外施設の利用を避けてしまいがち。

・車椅子を使用している人にとって、降雪のある冬の屋外での活動は厳しい。

・施設において段差の問題を解消するためには、ＪＲやバスなどの公共交通機関で使用されている可動式のスロープがあるとよい。

・エレベーターなどの設備があるかどうかなど、参加する前に情報提供があるとよい。

・障がいの種類によって必要なサポートや配慮の内容が異なる。ツアーを企画する際は、当事者だけでなく日常的にサポートをしている家族や学校の教員等も同伴できるようにすると、運営者側も安心ではないか。

・専門スタッフや支援する人などサポート体制が充実しているとよい。

・自然体験活動を希望するかどうかは、施設の設備がバリアフリー等の対応がなされているかどうか、自力で行ける場所かどうかによって左右される。

・施設がバリアフリー等の整備が進んでいる場所には何度も行きたいという気持ちになる。

・障がいの有無にかかわらず、ツアーに参加するかどうかは参加者の選択である。

・障がいの有無にかかわらず、個々の興味や関心が異なるので、体験できる選択肢を複数用意し、グループに分かれて実施できるとよい。

・障がい者の中には、自宅に引きこもっている人も多いと思うので、このようなツアー企画のチラシを見て、少しでも外に出てみようという気持ちになることを期待したい。

（３）ヒアリング調査を通して得られた結果

・車椅子を使用している人への対応として施設・設備のバリアフリー化は必要不可欠である。

・施設・設備の整備状況や人的支援体制の有無など、参加の判断材料となる情報を事前に提供することが必要である。

・自然体験活動等へのニーズはあるものの、活動場所となる施設・設備がバリアフリー等の対応がなされているか、自力で行ける場所かなどによって参加が左右される。

・障がい種や参加者の好みによって選択できるようなプログラムを提供することが望ましい。例えば、住箱とテントのどちらを利用するかは、障がい種によって利用のしやすさが異なる上、障がいの有無にかかわらず好みによっても異なるので、利用者が選択できるようにするとよい。

・屋外で活動する際には、障がいの有無にかかわらずリスクを伴うので、ガイドや専門スタッフ等の人的サポート体制の充実を図ることが必要である。

・障がい種や障がいの度合いによって必要とするサポートの内容に個人差があるため、ツアー企画

の際は、当事者だけでなく日常的にサポートをしている家族や学校の教員等も同伴できるようにするとより多くの障がい者が安心して参加できる。

・様々な人に頼ってよいという考えのもと、障がい者の学びのニーズを踏まえた合理的配慮を含む必要な支援体制の充実を図ることが必要である。

５　考察（成果と課題）

（１）成果

・コロナ禍において、現地のフィールドで実際に体験活動を実施することはできなかったが、調査員が収録した動画を視聴してもらうことで、当事者の意見を聞くことができた。

・実施した調査対象者２名は、いずれも肢体不自由ではあるものの、車椅子を使用している人とそうでない人の両方の視点からの意見を聞くことができた。

・高等養護学校に通学した経験がある調査対象者からは、様々な種類の障がいを持つ人と接してきた経験を踏まえ、多様な障がい者の視点から意見を聞くことができた。

・障がいの有無にかかわらず、自然体験活動を行う場合、施設・設備等の整備だけでなく、ガイドや専門スタッフなどの人的な支援体制が必要であることがわかった。

・コロナ禍において自然体験活動等を実施する際に必要とする合理的配慮については、障がい者に特化したことではなく、高齢者や乳幼児、基礎疾患がある人への配慮などと同様に感染対策が必要であることがわかった。

（２）今後の課題

・今回の調査では、肢体不自由者を対象にヒアリングを実施したが、様々な障がいを持つ人を対象にしたプログラムを開発するためには、他の種の障がい当事者を対象に調査を実施する必要がある。例えば、視覚障がいや聴覚障がい、知的障がい、精神障がい、発達障がいなど障がいの特性を踏まえた配慮の内容を検討する。

・コロナ感染症への感染対策として、現地フィールドにおける体験活動を実施することができなかったが、実際に体験してみないと気付かない課題も考えられることから、障がい当事者による実地体験を通した調査を実施する。

・青少年教育施設など社会教育施設において、障がい者も参加可能な自然体験活動のモデルプログラムを開発し検証する。

・事業を進める上で、各地域で障がい者の取組を支援する人材の増加、普及啓発や人材育成に向けた取組を行うなど、障がい者の学びのニーズを踏まえた合理的配慮を含む必要な支援体制の構築を図る。

・身近な人がいなくても支えられる環境づくりとそのための人材育成を通した共生社会の実現を目指す。